

定年を迎えての1年

定年を迎えるにあたり、尊敬する国立病院機構の先輩からは「立つ鳥跡を濁さず」ではなく、「有終の美」を演出するようとのアドバイスを受けた。元来、社交性に乏しく、内気な性格から自分自身を売り込むことは苦手であった。しかし、約40年間の臨床経験の「まとめ」を自分なりに絵に描いてみるのも一つの物語として面白いのではないかと思うようになった。

大学紛争を経験した最後の世代である。紛争以前の医師と、それ以降の若い世代を対比してみると、どうもライフスタイルが異なるような気がする。とりあえず、大学時代の不勉強を取り戻すために、「症例報告」に努めた。年間6回の学会発表とその論文作成を基本に据えた。

岡山大学での研修医生活の中で、指導医から与えられた最初のテーマは、「網嚢ヘルニアの2治験例」という手術症例であった。症例報告が医学雑誌「臨床外科」に掲載されたのがスタートであった。印刷物の新鮮な感触が刺激となった。定年を機に整理してみると約100篇の論文を書いたことになる。病院の役職を担うようになり、かなりスピードは落ちたものの症例報告の積み重ねにより、患者さんとの思い出が幾重にも織りなされ、より内容の豊かな物語が展開されたように思える。

2014年1月11日。沖縄県医師会医事功労者県知事表彰を受けることになった。残念ながら政局は混乱を極めた。年末に、県知事による普天間飛行場の移設と辺野古の埋め立て申請が承認された。県知事の「いい正月を迎えられる」との発言があり、反対運動の火に油が注がれた。マスコミが燃えた。残念ながら、せっかくの県知事表彰も肩身の狭い思いの受賞となった。

前年は、重粒子線治療施設の沖縄への誘致に真剣に取り組んだ。民主党政権時より相談は受けていた。肺がんも治療のターゲットになるため、地域医療のカンフル剤としての位置づけを念頭に検討委員会に参画した。ランニングコストを最小限にし、箱モノにならないように検討を重ねた。残念ながら、またしても政局がらみとなった。設置場所が西普天間となったところで、検討委員会の委員を辞任した。

研究は積み重ねである。地道な道程である。政局にからめての足し算では、将来は無い。

2014年12月14日。伝統ある沖縄県医師会医学会の会頭を務めることになった。定年1年生の締めくくりである。離島県沖縄においては、効率的な地域医療の展開と高い水準の維持のために、施設間の機能分担が重要な意味を持つことを強調した。「診断技術の均てん化」と「治療技術の拠点化」を基本理念として。

またしても政局が動いた。県知事の交代劇である。10万票もの大差で民意が示された。自然を生かした観光立県。日本の南の玄関。平和を迫及する豊かな文化。格差社会の是正。長寿県沖縄の復活。

経済優先の政局の波に洗われることなく、地道な一步を踏みしめて歩みたい。